句構造に関する指導項目および指導過程

―句の内心性からのアプローチ―

広島大学大学院　山岡 大基

0 本論の目的

本論は、句(phrase)の指導に関する留意事項を統語論的観点から整理することを目的とする。特に句の内心性(endocentricity)に着目し、句構造の理解を効果的に促す指導項目および指導過程の提案を行う。なお、指導項目に関しては拙論(2000)において発表した論考を基礎としているが、本論との関係において必要な部分には修正を加えている。

1 句の重要性

1.1 構造依存原理

言語における統語的操作には構造依存原理(structure dependence principle)が働く(Radford 1997、Brown and Miller 1991)。すなわち、統語的操作は、語の線形的な配列ではなく、統語構造が持つ階層構造に対して適用される。たとえば "The people who are standing in the room will leave soon." という文から Yes-No 疑問文を派生する場合、「左から数えて最初の助動詞を文頭に移動せよ」といった線形的な規則では適格な派生が行われない。ここにおいては、当該の文が、図1のような抽象的な階層構造を有していると想定した上で、たとえば「最上部の文が直接支配する動詞句に含まれる助動詞と、最上部の文が直接支配する名詞句の順序を入れ替えよ」のような規則を設けねばならない。

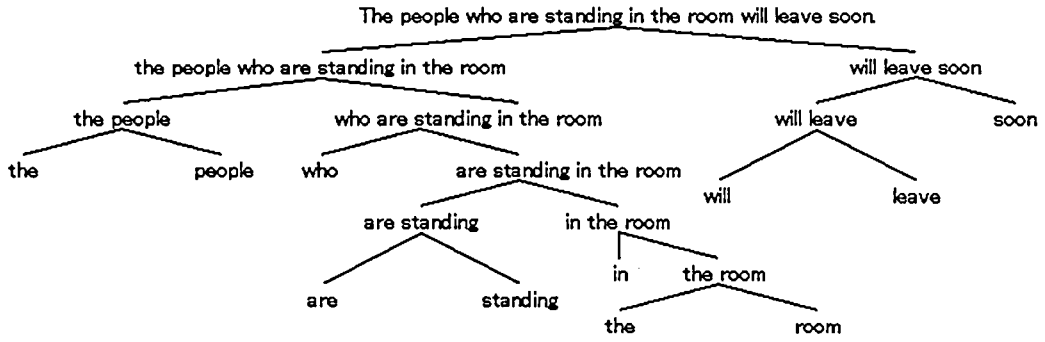

図 1. "The people who are standing in the room will leave soon" の階層構造

このように、統語的操作を行う際は常に階層構造が想定されねばならないが、そのような言語の制約は「構造依存原理」と呼ばれる。また、統語的操作が依存する構造(図1のような枝分かれ図においては

各節点に表れる要素)は「構成素(constituent)」と呼ばれる。

構成素のうち、語よりも大きな構造であり、かつその内部に主部ー述部関係を持たない(すなわち節でない)ものは「句(phrase)」と呼ばれる。上述したように、構造依存原理の働きによって語が統語的操作の対象たりえないとするならば、表面的には統語的操作が語を対象として適用されている場合であっても、潜在的にはその操作の対象は句であると考えられる(1)。以上より統語的操作の対象は句および節であるということができる。また、節は句が適切に配列されて構成されるものであるから、句は節よりもさらに基本的な単位であるといえる。これらの意味において句は統語的操作において重要な単位である。

1.2 句の二面性ー外心性と内心性ー

句にはいくつかの種類があり、「動詞句」「名詞句」などの品詞名によって分類されるが、その命名法は大きく2通りに分かれる。これは、句が持つ「外心性(exocentricity)」と「内心性(endocentricity)」という二面性に対応するものである。

たとえば "Can you pass me the box on the table?" という文から "on the table" という句を取り出すことができる。このとき、 "on the table" という句全体は "box" という名詞を修飾しているので形容詞としての機能を有している。この機能に着目するならば、この句は「形容詞句」と命名される。また、同じ "on the table" という句が "There's a hamster running on the table." という文中にある場合、この句は "running" という動詞を修飾しているので副詞としての機能を有しており、「副詞句」と命名される。これらのように、句がその外部構造との関係においてある特定の品詞の機能を有する性質のことを「外心性」と呼ぶ(2)。

いっぽう、 "on the table" という句の内部構造に着目すると、この句は前置詞 "on" を中心とした構造をなしていることがわかる(かりに "on the *big* table *by the door*" のように修飾語句が付加されても、その「上に」あるという中心的意味に変化はない)。この内部構造に着目するならば、 "on the table" は「前置詞句」と命名される。このように、句がある要素を中心とした内部構造を有する性質のことを「内心性」と呼ぶ。なお、その中心的要素は「主要部(head)」と呼ばれる。

このように、句には外心性と内心性という二面性が存在する。この二面性は 1 つの句に常に共存する性質であって、分離することはできない。

1.3 句構造指導の欠如

前節までにおいて、句が統語的に重要な単位であること、および句には外心性と内心性の二面性があることを述べた。本項においては英語指導における句およびその二面性の取り扱いについて考察し、問題点を指摘する。

まず、句が統語的に重要であることは従来も認識されており、句を活用した指導法がいくつか提唱されている。特にリーディング指導においてはチャンキング法(スラッシュ・リーディング法、フレーズ・リーディング法)や各種の記号付与方式などが開発されている(寺島 1986、名和 1992 など)。また、その他の技能においても句を単位とした音読や英作文法などの指導法が提唱されている(田地野 1995、静 1999 など)。この意味において英語指導において句を活用しての各種技能の指導はこれまでも行われてきているといえる。

しかしながら、句の二面性やその内部構造など句そのものに関する指導については、従来十分に論じられてきたとは言いがたい。特に各種の句(動詞句・名詞句など)がいかなる内部構造をなしているかについては、句の理解・産出に大きく関係する事項であるにもかかわらず、その指導法がほとんど提案されておらず、学習者の帰納的な学習のみに委ねられている。

つまり、従来は句を活用した諸技能の指導は議論の対象となっていたが、句そのものの指導について

は十分な議論がなされてこなかったのである。特に、構造面の指導がその重要性に比して軽視されてきたという問題点があるといえよう。

1.4 句構造の記述と内心性

1.3 において指摘した問題を解決するためには、句の内部構造を記述したモデルを用意し、それに基づいた指導法の構築を試みる必要がある。このとき、たとえば「動詞句の構造」、「形容詞句の構造」などのように句構造を記述するためには、句の二面性のうち内心性に着目して句を命名する方がより効果的である。というのは、1.2 で見たように、外心性に着目した命名法によれば、同一の構造に対して異なる名称が与えられる場合("on the table" の例)や、逆に、異なる種類の構造に対して同一の名称が与えられる場合("the box on the table" の "on the table" も、"a very big vase" における "very big" も「形容詞句」とされる)が頻繁に生じるため、句構造を統一的に記述することが困難になるためである。内心性に着目した命名法によればこのような問題は生じない。内心的な命名法は、そもそも句構造を基準とした命名法であるからである。

このことを考慮に入れるならば、句構造の記述にあたっては内心性を基準とした構造記述モデルを求め、そのうえで指導の枠組みを構築するという方途を選択することができる。この方向性に沿った提案を第2節において行う。

2 句の内心性の指導項目および指導過程

2.1 句構造の記述

2.1.1 Xバー理論

第 1 節において、句構造指導の枠組みを構築するためには、句の内心性を基準とした構造記述モデルが必要であると述べた。そのようなモデルは数種類が提唱されているが、特に生成統語論におけるXバー理論(X-bar theory)が、内心性の観点から句構造について統一的な説明を提供している。(Chomsky 1986、Radford 1988、中村他 1989、Haegeman 1994、田窪他 1998、竹沢・Whitman 1998、長谷川 1999)

Xバー理論とは、生成文法研究の過程において普遍文法(Universal Grammar)の1部門として提唱された理論であり、言語における句構造の決定に大きく関係するとされた。この理論においては、全ての句において主要部とそれに関わる要素が内心構造をなしているとされる。Xバー理論は、現在の生成文法理論においては普遍文法の1部門としての位置付けが否定されているが、統語理論としての記述的妥当性は保持していると考えられる。

Xバー理論によると、句はその中心要素である主要部の他に、補部(complement)、指定部(specifier)、付加部(adjunct)という要素が結合されて図2のような構造をなしており、この構造は全ての種類の句に共通しているとされる。

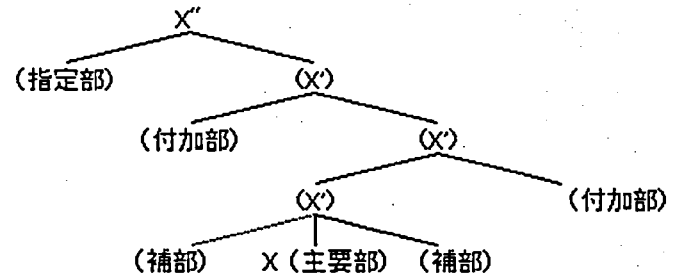

図2. Xバー理論における句構造[3]

具体的な個々の句においては、主要部、補部、指定部、付加部の位置に特定の要素が配置される。たとえば英語の動詞句(VP)であれば、図3のような構造をなすと考えられる。

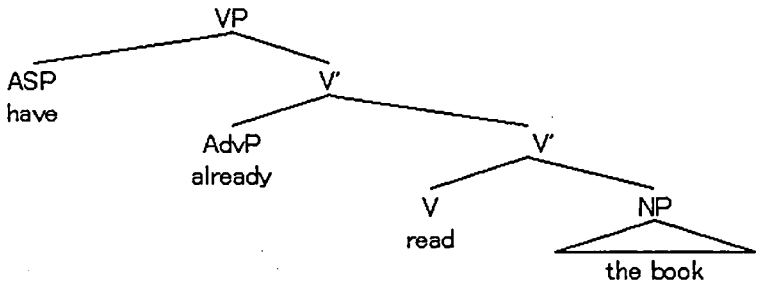

図3. VP "have already read the book" のXバー式型による記述(ASP = aspectual auxiliaries)

Xバー理論においては、このような記述法により、あらゆる種類の句構造を統一的に記述することが可能であるとされる。

2.1.2 句の統語的性質

以上のように記述される句の統語的性質のうち、英語指導との関係において特に重要であるのが次の4点である。

a. 主要部がある:
   句の内心性という観点からは全ての句に該当する
b. 特定の主要部には特定の句構造が対応する:
   たとえば動詞句における補部は名詞句であるが、名詞句における補部は前置詞句である
c. 1つの大きな句に複数の小さな句が含まれる:
   "a very old statue with an inscription" という名詞句には形容詞句 "very old" や前置詞句 "with an inscription" が含まれている
d. 主要部の位置に関して日英語に顕著な対照性がある:
   英語では "a *computer* of IBM" のように句の中位置であるのに対し、日本語では「IBMの*コンピュータ*」のようにほぼ常に末尾位置である

2.2 句構造に関わる指導項目

2.1において言及した句構造の記述モデル、およびそこから明らかになる句の統語的性質を考慮に入れたうえで、句構造指導における指導項目として筆者は拙論(2000)において次の6点を提案した。

(1)語の品詞が持つ性質の理解
(2)句が主要部を中心として構成されていることの理解
(3)要素の付加により句が拡大することの理解
(4)主要部の品詞と句の内部構造との対応関係の理解
(5)主要部の位置に関する日英語間の対照性の理解
(6)主要部を同定すること

本項においては、各項目についてやや詳しく説明する。

(1)語の品詞が持つ性質の理解:たとえば、習熟度の高い英語学習者が "...almost *unconsciously* responded to..." という部分を持つ英文と "almost *unconscious* responded to..." という部分を持つ英文とが異なる構造を持つと判別できるのは、句の境界を適切に把握しているからであり、その基盤として異なる品詞(この場合は副詞と形容詞)の特性の相違が理解できているからである。品詞理解にはこのような重要性があるため、句構造の指導においては品詞の理解が必ず達成されるべきであり、他の指導項目と比較しても、優先的・重点的に指導が施されるべき項目であると考えられる。

品詞理解を高める具体的な指導法としては、辞書を手がかりとして特定の品詞を英文中より指摘する練習や、与えられた語群を用いて文法的に可能な結合を可能なかぎり多く指摘するような練習を行うことなどが考えられる。また、ある特定の品詞であることの手がかりとなるような接辞(たとえば"-ed"は典型的には動詞に付加される接辞である)について指導を行うことも有効であろう。

(2)句が主要部を中心として構成されていることの理解:1.2 で述べたように、主要部はその句の中心的な意味を表す要素であり、このことは句の内心性と密接に関係する。したがって、句構造の指導を行う際には、まず主要部という概念を明示的/非明示的に導入しておき、主要部に各種の構造が付加されることで句が構成されていることを理解する必要がある。

指導法としては、たとえば下のような例を示し、ある1つの語に対してどれだけ要素が付加されようともその句の中心的意味に変化がないことを示す、というようなことが考えられる。

"dog" → "two dogs" → "two big dogs" → "two big dogs of my uncle's"
→ "two big strong dogs of my uncle's which were born in Hiroshima"

なお、項目(2)は、種類の別なく句という統語的単位一般に該当する性質に関わるものである。したがって、項目(1)に次いで優先的・重点的に指導されるべきであろう。また、句指導の各局面において反復的に扱うことも重要であると考えられる。

(3)要素の付加により句が拡大することの理解:この項目は(2)と表裏一体の関係にある。特に、句の内部構造は原理的には無限に重ねることが可能であるという点は重点的に指導すべきである。というのは、構造が重ねられることによって内部構造の複雑な句が構成される様相を認識することは、複雑な句の理解力を向上させることにつながると考えられるからである。

指導法としては(2)において示したものと同様の手法が考えられるが、この項目において特に留意すべきであるのが、付加される要素自体も句であるということである。たとえば、

"good" → "very good" → "very good in every respect" → "very good in every respect concerning its quality" → "very good in every respect concerning its quality which is the issue here"

という例においては、"concerning its quality" や "which is the issue here" は主要部 "good" に直接付加された要素ではなく、それぞれ "respect" や "quality" に付加された要素である。このような点を強調することによって、複雑な構造を持つ句の理解が促進されると考えられる。項目(2)(3)は主に2.1.2の c において指摘したことと関係する。なお、項目(2)よりも(3)のほうがやや発展的な内容であるので、(2)よりも指導上の優先順位は低いと考えられる。

(4)主要部の品詞と句の内部構造との対応関係の理解:この項目は、2.1.2 の b において指摘したことと関係する。句はその種類によって可能な内部構造が異なる(次頁表1参照)が、このことを具体例を通じて個別的に理解させることを意図したのがこの項目である。

表1 各種の句において可能な構造

動詞句(VP)	名詞句(NP)	形容詞句(AP)	副詞句(AdvP)	前置詞句(PP)
1動詞＋名詞句 2動詞＋副詞句 3動詞＋前置詞句 4動詞＋不定詞 5動詞＋節 6副詞句＋動詞 7複合型	1限定詞＋名詞 2名詞句＋名詞 3形容詞句＋名詞 4名詞＋形容詞句 5名詞＋前置詞句 6名詞＋不定詞句 7名詞＋分詞句 8名詞＋接触節 9名詞＋関係詞節 10複合型	1副詞句＋形容詞 2形容詞＋ 前置詞句 3形容詞＋ 不定詞句 4複合型	1副詞句＋副詞 2副詞＋前置詞句 3複合型	1前置詞＋名詞句 2副詞句＋前置詞 ＋名詞句

具体的な指導法としては英文和訳や整序作文を始めとして様々なものが考えられるが、指導の際には、表1に示したような各種の構造を可能な限り網羅することが重要である。

(5)主要部の位置に関する日英語間の対照性の理解:この項目は、2.1.2の d において指摘したことと関係する。ほとんどの場合主要部が句の末尾位置を占めるという日本語の顕著な傾向は、特に英語の句を産出する練習において有効な手がかりになると考えられる。

実際の指導としては、英語の句とそれに対応する日本語の句について、それぞれの主要部を指摘する練習が必要であろう。たとえば、"the cat on the chair" と「椅子の上のネコ」という2つの句に対して、"the cat on the chair" 「椅子の上のネコ」のような記号を付与する練習などが考えられる。また、このような記号を付与した日本語の句を英語に翻訳するという練習も考えられる。

なお、項目(4)(5)はすべての個別的な事例に関わるものであるので、句指導の過程全体を通じて必要に応じて扱われるのがよいであろう。

(6)主要部を同定すること:この項目は、句の内心性を理解するうえで必須の項目であるが、それ自体で独立しているというよりは、項目(1)～(5)すべての指導において必要となることである。いずれの項目においても主要部を同定する作業は関係するので、特に独立して指導すべき項目であるというよりは、上述の各項目の指導において随時留意すべき項目であるといえよう。

あえてこの項目に関わる指導法を挙げるとすれば、たとえば英語の句とそれに対応する日本語の句を提示し、日本語を手がかりとして英語の主要部を指摘する練習や、"very big"、"the very big door"、"on the very big door"、"the spider on the very big door" が、それぞれ主要部の異なる句であることを、日本語を手がかりとして理解する練習などが考えられる。

以上、本項においては、句構造に関わる指導項目を6点提案し、その具体的な指導法についてもわずかながら言及した。これら6項目に関して注意されたいのは、これらが必ずしも(1)から(6)へという順序で指導されることを想定したものではないということである。上で項目間の優先順位についての言及を行ってはいるが、実際の指導においては1つの学習活動が複数の指導項目に同時に関係することが十分に考えられる。したがって、指導の順序あるいは過程に関しては、上述の6項目およびその他の必要事項を一貫した論理によって再構成する必要がある。特に、項目(1)として挙げた品詞理解は句構造理解の全ての側面に関係する最も基礎的かつ重要な事項であるため、各品詞をどのような過程に沿って指導するかは慎重に検討されねばならない。次項においてはこの問題に関する提案を行う。

なお、本論では「指導」という術語を用いているが、これは必ずしも明示的な説明・提示のみを想定したものではない。たとえば教材作成の観点として上述の各項目を参照する場合は、学習者はこれらの項目を非明示的な形で学習することになるが、本項ではそのような非明示的な「指導」も含めて論じていることに留意されたい。

2.3 句構造に関わる指導過程

前項までの議論を踏まえて、本項では句構造の指導過程を提案する。2.2 において提案した指導項目は全ての種類の句(動詞句、名詞句など)に共通して該当するものであるが、表1が示すように、構造の多様性は句の種類によって異なる。また、上述のとおり品詞理解は句構造の指導においてひじょうに重要であると考えられるため、どの品詞および句をいかなる順序によって指導するかは慎重に検討せねばならない。本項においては、この品詞理解という観点から句構造の指導過程の一試案を提示する。(なお本項においては語の品詞としては「動詞」であれば「V」という表記を用い、句の種類としては「動詞句」であれば「VP」という表記を用いる。以下同様に「名詞(句)」は「N(P)」、「形容詞(句)」は「A(P)」、「副詞(句)」は「Adv(P)」、「前置詞(句)」は「P(P)」のように表記する。)

2.3.1 指導過程「V→N→NP」

古典的な句構造規則が英語の文構造を「S→NP VP」と記述するように、英語の文構造において最も中心的な役割を担うのはNPおよびVPであるから、句構造指導においてもNとNP、およびVとVPは優先的に取り扱うべき範疇であるといえる。ただ、主語一述語という命題関係においてVPは述語を担う部分であり、典型的に文の主要な情報を表すこと、また、構造的には他の種類の句を最も包括的に支配できること、そして主語NPは、情報構造の観点から文中においてはより単純な構造をなすことが多いこと、などの点から総合的に判断するならば、VPの方がより重要な範疇であるといえる。したがって、句構造の指導はまずVという品詞から始めることとする。

次に、Vは様々な要素と結合することでVPを形成するわけであるが、なかでも典型的であるのがNPである。また、上述したような理由においてもNPは重要であるので、Vの次に指導する範疇はNとすることは妥当であろう。

その一方で、VPはNP以外の範疇との結合によっても形成される(表1参照)のであるが、それらの指導に関しては2通りの扱い方が可能であるように思われる。1つは、N以外の範疇の指導は行わず、NPの指導に移行することが考えられる。これは、Nは他の範疇と比較して、Vにとってより重要な情報を担うことが多いことや、N以外の範疇はV以外の範疇との関係において指導することも可能である(たとえばPPはAPやAdvPとの関係においての指導が可能である)ことを考慮して、ひとまずNを優先的に扱うという配慮である。この場合、Nと結合してNPを構成する要素の指導が次に行われることとなる。

もう1つの方法としては、NおよびNPの指導を優先させずに、N以外の範疇もNと並列して導入するという方法である。この場合、AdvPやPPの指導がこの段階において行われることになる。この2通りの過程の相違については 2.3.5 において述べる。

ところで、いずれの過程を選択するにせよ、この段階でVPの指導が行われるわけであり、ここにおいて句という単位が学習者に導入される。したがって、2.2 における指導項目のうち(2)の指導を行うことが可能である(他の項目が不可能というわけではないが、初期段階においては句における主要部の役割を理解することが特に重要であるため、VPという形で句の概念が導入された時点で、主要部についての指導が行われるべきであろう)。また、場合によっては項目(5)も、主要部という概念を理解するための手がかりとして指導することが可能であろう。

2.3.2 指導過程「NP→A→AP」

次の段階であるNPの指導においては、Nと結合してNPを構成する範疇の指導が行われることとなる。そのような範疇としてはA、PP、不定詞句、分詞句があるが、ここにおいても上の2通りの過程が可能である。上における議論と同様にPPは他の範疇との関係において指導が可能であること、また不定詞句や分詞句はVPの一種として扱いうるため(4)、後の段階において発展的に扱うことが可能であることなどを考慮し、ここにおいてはAの指導のみを行う過程が考えられる。その一方で、AとPPの両方の指導を行う過程も考えられるため、2.3.1と同様に2通りの過程が想定できる。

なお、この段階において扱われるAは、NP中に1語のみで現れるものであるが、そのようなAは典型的には限定用法のものである。叙述用法のAは他の要素と結合してAPを構成することが多いので、これに関しては次のAPを指導する段階において扱われることとなる。

この段階においては、前段階より継続して指導項目(2)(5)の指導が可能である。また、VPとNPという複数の範疇が導入されているため、たとえば "see little birds" と "two little birds" のような句を用いて、主要部を正確に把握し、その句がVPであるかNPであるか判別する練習などを行うことが可能となる。このような練習は、指導項目(6)に関わるものである。

2.3.3 指導過程「AP→Adv→AdvP」

NPの次の段階はAPの指導である。これは、Nを修飾するのは、一部のAdvP等を除き、典型的にはAPだからである。APにおいてAと結合するのはAdv、PP、不定詞句である。ここにおいても、2.3.2.までの段階と同様に2通りの過程が可能である。Advの指導のみを行う過程と、Adv、PP、不定詞句全ての指導を行う過程である。

この段階においては、前段階より継続して指導項目(2)(5)(6)の指導が可能である。また、VP内に現れるNPが、さらにAPによって拡大させられるため、この段階において項目(3)の指導を行うことが可能である。たとえば、"buy" → "buy a bike" → "buy a red bike" → "buy a surprisingly red bike" のように句が拡大することに注意を喚起することが可能であろう。

2.3.4 指導過程「AdvP→PP(→その他)」

APの次の段階はAdvPの指導である。これはNP→APの場合と同じく、Aを典型的に修飾するのがAdvPだからである。この段階に至るまでにPPの指導を行っていない場合はここにおいてPPの指導を行う。PPはVP、NP、AP、AdvPという4種類の句全ての内部に現れ、様々な意味を付加することのできる要素である。したがって、PP指導においてはそれらの範疇との関係において導入を行うことが可能である。また、VP内のAdvPについても、2.3.1の段階で指導していないのであればここにおいて扱う。

PP等の指導が行われた後、もしくはこの段階以前にPP等の指導を既に行っていた場合は、句の内部構造として節や不定詞句・分詞句などが用いられるような、やや発展的な構造についての指導に移行する。これらの構造は、これまでに指導してきた構造を基礎とするものであるから、それらの知識に言及しながら指導することができる。

2.3.5 指導過程のまとめ

以上の議論をまとめると、筆者が提唱した句構造の指導過程は次頁図4のように表すことができる。上の議論において示した2通りの過程は、図4における「→」により結合されている最上列のみを選択する過程と、「＼」により結合されている下列も併せて選択する過程の2つによって表されている。この2つの過程の相違であるが、上列のみを選択する過程は、品詞間の関係に焦点を当てて指導する場合に採用されるものであるといえる。

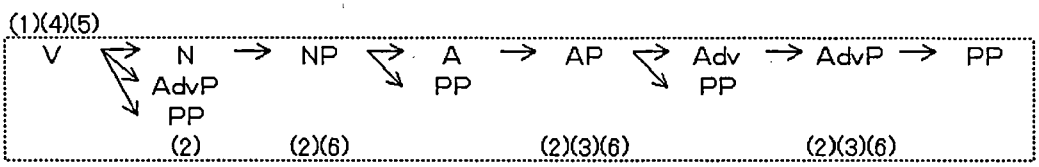

図4. 句構造の指導過程

というのは、上列の過程における「V→N→A→Adv」という順序が品詞間の修飾関係を反映しており、品詞間の関係を理解するのに適切な配列となっているからである。たとえば、"speak very educated English" における修飾関係は次のように言い表すことができる。

"speak"(V) →「何を？」→ "English"(N) →「どのような？」
→ "educated"(A) →「どれほど？」→ "very"(Adv)

個々の句における構造の多様性の指導は後の段階に行うものとして、まずこのような直線的な過程に従った指導を行うことで品詞間の関係を理解することが容易になると考えられるのである。

いっぽう下列も同時に選択する過程は、品詞理解がある程度なされている等の理由により句構造を重点的に指導する場合などに採用されるものであるといえる。というのは、多様な品詞が並列的に導入されたとしても混乱が生じないのであれば、VPやNPといった英語の文構造において重要な役割を果たす範疇を包括的に扱うことが可能であるからである。

なお、6つの指導項目との関係であるが、項目(1)(4)(5)は図4の過程全体を通じて指導されるものであり、その他の項目に関しては、図中に示した段階において指導されるのが効果的であると考えられる。ただし、図中に示した項目が必ずしもその段階において指導される必要はないであろう。複数の項目を同時に指導することが困難であれば、ある項目の指導は後の段階に譲るということは可能である。

3 まとめ

本論においては、句という単位の重要性を統語論的な観点から確認し、句が有する外心性と内心性という二面性に言及した。また、従来の英語指導における句の取り扱いには句構造の記述およびその指導が欠けているという問題点を指摘した。その解決策として内心性の観点から句構造を記述したモデルをXバー理論に求め、そこにおいて明らかにされる句の統語的性質を踏まえて句の指導項目および指導過程を提案した。指導過程の構築においては特に品詞理解という観点を重視した。他の観点からは異なる過程が構築可能であるかもしれないが、以上の議論が示すように、特に品詞理解を重視するならば、本論において提示された指導過程は最も合理的な試案であろう。

1.3 において述べたように、句を活用した英語指導は従来もなされてきている。本論において提案した指導項目および指導過程は、それらに欠けていたものを補うためのものであるといえる。つまり、従来は句という構造自体は自明の前提とした指導が行われてきていたのであるが、その句という構造自体をいかに指導すべきかについて、本論において考察を行った。

なお、本論においては扱わなかった外心性との関係について一点補足する。ある句全体が 1 つの品詞として機能するというのが外心性において重要な点であるが、そのことを理解するためには品詞理解が必須であることは明らかであろう。品詞理解を重視した本論における提案は、句の外心性を指導する際の基盤としても貢献しうるものである。

【引用文献】

Brown, Keith and Miller, Jim. 1991. *Syntax* 2nd edition. Routledge.

Chomsky, Noam. 1986. *Knowledge of Language*. Praeger.

Haegeman, Liliane. 1994. *Introduction to Government and Binding Theory* 2nd edition. Blackwell.

Radford, Andrew. 1988. *Transformational Grammar*. Cambridge University Press.

Radford, Andrew. 1997. *Syntactic Theory and the Structure of English*. Cambridge University Press.

安藤貞雄. 1983.『英語教師の文法研究』. 大修館書店.

靜哲人. 1999.『英語授業の大技・小技』. 研究社出版.

田窪行則, 稲田俊明, 中島平三, 外池滋生, 福井直樹. 1998.『生成文法』. 岩波書店

竹沢幸一, John Whitman. 1998.『格と語順と統語構造』. 研究社出版.

田地野彰. 1995.『英会話への最短距離』. 講談社.

寺島隆吉. 1986.『英語にとって学力とは何か』. 三友社出版.

中村捷, 金子義明, 菊地朗. 1989.『生成文法の基礎』. 研究社出版.

名和雄次郎. 1992.「速読の指導」. 英語科教育実践講座刊行会.『ECOLA 3 読むことの指導』. ニチブン. pp. 72-80 所収.

長谷川信子. 1999.『生成日本語学入門』. 大修館書店.

山岡大基. 2000.「『内心構造としての句』の指導ーその重要性と指導項目の提案ー」. 第 26 回全国英語教育学会自由研究発表資料. 2000 年 8 月 9 日(水). 東京国際大学. [On-line]. Available: http://hb8.seikyou.ne.jp/home/amtrs/zennkoku2000.htm

【注】

(1)たとえば "People like pandas." という文から Yes-No 疑問文を派生すると "Do *people* like pandas?" のようになり、表面的には "people" 1語のみが移動操作の対象となっているように見える。しかし、"people" に "many" が付加された "Many people like pandas." からは "Do *many people* like pandas?" が派生される。ここにおいては "many people" という句全体が操作の対象となっており、統語的操作の対象は本質的には句であると考えられる。

(2)なお、厳密には「外心性」の定義には、「句全体の機能と一致する語が句内に含まれていてはならない」という制約が必要であるが、本論とは直接の関わりを持たないため、これ以上の議論は割愛する。

(3)Xバー式型によって表される句構造がいかなる形をなしているかについては、研究者間に見解の相違がある。たとえば英語において限定用法として用いられる形容詞が占める位置に関して、本論では補部の位置を主要部の前後2箇所に設定している(図2において、主要部の左側の補部に向かう線が破線となっているのは、このモデルにおいて主要部左側の補部がNPのみに該当する例外的なものであることを示すためである)が、2股枝分かれを厳密に保持する立場からは、何らかの機能投射(functional projection: FP)を句構造上に設けたうえで説明がなされることがある。本論においては実用的な観点からRadford(1988)の分析に従っている。

(4)生成統語論においては、不定詞や分詞は動詞句ではなく非定形(infinite)の文として扱われるが、実用的な観点から、本論においては伝統的な「準動詞」という分析に従うこととした。